

Hello! FUJISEI

No. 141

高齢化の要因は大きく分けて、①平均寿命の延伸による65歳以上人口の増加と、②少子化の進行による若年人口の減少、の2つです。

戦後、我が国の死亡率（人口1,000人当たりの死亡数）は、生活環境の改善、食生活・栄養状態の改善、医療技術の進歩等により乳幼児や青年の死亡率が大幅に低下したため、昭和22年の14.6から約15年で半減、38年に7.0になり、その後はなだらかな低下を続け54年には6.0と最低を記録しました。近年はやや上昇傾向にあり、平成23年は9.9（死亡数は125万3,066人）でした。

この死亡率の上昇傾向は、高齢化の進展により、他の年齢階層と比べて死亡率が高い高齢者の占める割合が増加したことによるもので、人口の年齢構成に変化がないと仮定した場合の死亡率は依然として低下傾向にあり、65歳以上の高齢者の死亡率は、戦後低下傾向が続いています。また、高齢者の死亡率を男女別年齢別にみると、いずれの年齢層においても女性の死亡率が男性の死亡率を大きく下回っています。

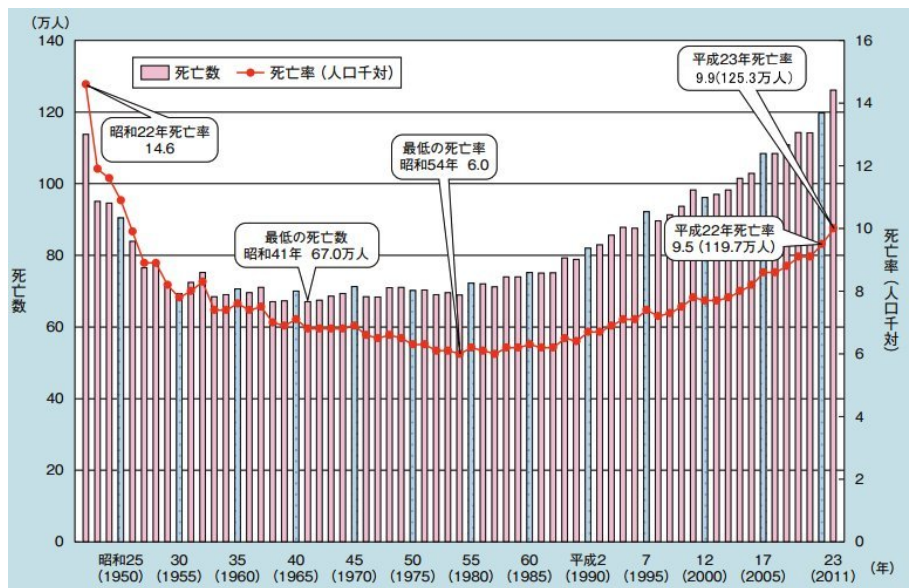
「平成23年簡易生命表」では、平均寿命は男性79.44年、女性85.90年ですが、これは東日本大震災が影響しており、地震による死因を除去す

我が国の高齢化の状況

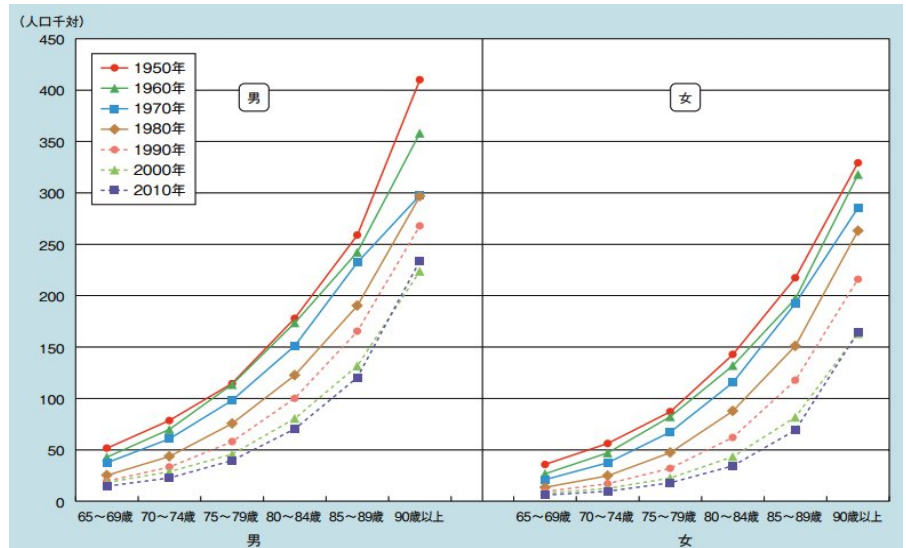
死亡率の低下に伴い 平均寿命は大幅延伸

ると、男性で0.26年延びて79.70年、過去の推移をみると、平均寿命は、女性で0.34年延びて86.24年となっ 男女別・年齢別死亡率の低下に伴い大幅に延伸しています。

死亡数及び死亡率の推移



高齢者の性・年齢階級別死亡率 (1950～2010年)



資料：厚生労働省「平成24年版 高齢社会白書」より（一部修正）